

こんにちは。本日は御立寄り＆御手にとっていただきありがとうございます。
「有栖山 葡萄（ありすやま ぶどう）」と申します、しがないSS同人屋でございます。

まずは近況報告～。という名の言い訳大会～；；
この7月に、転職いたしました～～。結構雰囲気の良い会社なのですが、世間はすごいのですね。残業がこんなにあるとはw 毎日終電に近い時間に帰っております。
ということで、オフセットを出すことすらまなまりませんでした。コピー誌も、何とか休みの数日で書き上げたような実情です。
（本当のところは、前日の夜徹夜で書いていたという話も……）
いずれにしても、今回のコピー誌の作品は先の長いかなりの大作になる予定なので、出来たら次の冬コミにはその前半部分をオフセットで出せればなと、考えております

なお、グッズ関係は本日参加して下さった、たきじゃわ師匠作でございます～。
めったに手に入らない一品でございますので是非w
扇子も残すところあとわずかとなりましたね～、今日は雨で涼しいかな？

ということで、紙面は余っているのですが、体力が限界となってまいりました。
若くないのに無理はするなということですね。まったくもって、月日のたつのは早いもの君望が発売されてから3度目の夏が過ぎました。周りを見渡すと、すでにサークルも半数以下に減っていて寂しい限りです。でもうちは、このままつづけますよっ！

それではまた、冬にお会いできますことを……

「じゃあ私が鳴海さんの事貰ってあげる。そしたらお姉ちゃんも水月先輩も仲直りできるでしょ？」

「ううや、茜は孝之の腕をとり体を擦り付けてなついてみせた。」

「「ええっ！」」

なんとも突拍子も無い茜の提案と行動に、三人の驚きの声は綺麗に重なった。

「茜、幾ら後輩だからって許せないこともあるわよ」

「茜っ、お姉ちゃんだって許さないわよ」

水月と遙は茜に威圧をかけながら、二人がかりでにじり寄っていった。

二人のあまりの殺気に、茜は孝之から体を離れた。そして、二人をなだめようと引きつった笑いを浮かべながら弁明し始めた。

「あはっ、じよ、冗談だから。お姉ちゃんも水月先輩も落ち着いて。ねっ？」

茜はたじろぎながら、プール向かって後退りしている。

「冗談も性質が悪いとね」

「お仕置が必要よね」

案外あの二人が友達だというのが、最近良くわかってきた。あの二人の迫り方には、どこか似通った部分があった。孝之には、冷静にそんなことを観察しながら、事の成り行きをただ見守ることしか出来なかった。

「ね、二人とも冷静に話し合いで……」

そこまで言うした後一歩でプールという水際まで来ていた。

茜はすばやく振り向くと、

「ごめんなさいっ」

と一言言い残しプールへと飛び込んだ。水面には小さく綺麗な同心円状の波が残っていた。

「まちなさいっ、茜っ」

「逃げようだったって無駄よっ」

二人も茜の後を追って、プールに飛び込んだ。

（恋戦 夏のある日）